

テレビをはじめ様々なメディアで活躍する、
ちよつとカゲキな売れっ子漫画家さかもと未明さんが、
たかがいさんの作曲した「人生(いのち)」を歌い、発表します。
この出会いを機に、お二人が、
看護のこと、さかもとさんの病気のこと、人生のことを語り合いました。



さかもと未明 対談 たかがい恵美子



病気と向き合う

いのち 人生が響き合う

生活全体をみる
細やかな活動ができるナース

さかもと お会いできるのを楽しみにしていました。年齢も同じくらい、どうかがって。

たかがい 私も、楽しみにしていました。

さかもと ところで、たかがいさんは、どうして看護師を目指そうと思ったんですか？

たかがい 明確な理由というわけではないんですけど……。ひとつの転機は中学2年生のとき。日曜の朝、祖母が頭から血を流して起きてきたんです。

さかもと それは、どうして？

たかがい つまずいて、額を傷つけてしまったのです。家族は慌てて、日曜でもやっている病院を探して駆けつけたんですが「医師は、学会で不在です」って、とりつく島もなく…。

さかもと なるほど。

たかがい どうしていいかわからずにいるとき、看護師さんが「ちよつと、みてみましょうか」と声をかけてくださったんです。数分後、処置室から祖母が誇らしげな顔で出てきて、家族はみんな安心しました。そのとき、高度な技術だけでなく、こうやって人を安心させてあげることができると、そういう看護師になりたいな、と思ったんです。

痛みの向こうには精神的なつらさもある そこまでみてほしい

さかもと それ、すごくわかります。私も通院しているとき、体調が悪くて、待合室で横になってしまふことがあるんです。そういうとき、看護師さんが毛布を持ってきてくれたり、ベッドに案内してくれたりするんです。それが、とても嬉しくて…。

たかがい 高齢の方ですと、病院に来るだけでも大変ですからね。

さかもと 本当にそう。私自身、ものすごくつらいときは、病院に行くことさえできなくなるんです。そういうことを、もつとわかつてほしいですね。

たかがい さかもとさんは、SLE(全身性エリテマトーデス)を発症されたと、おうかがいしたのですが…。

さかもと はい、3年前に認定されました。SLEだけでなく、強皮症も患っています。

たかがい そうなんですか。

さかもと でも、よく考えれば、高校生のときから、塞ぎこむことが多くて…。陽に当たると調子が悪くなるし、うつ病の薬を服用したこともあるのですが、まったくよくならなかったの…。あの頃から発症していたのかなと、今では思っています。

たかがい 診断がつくまで、どれくらい

かかりましたか。

さかもと それが、どこに行ってもわからなくて…。「腸炎じゃないのか」「疲れでしょう」なんて…。医師は自分の専門分野しか診ないので、診断がつくまで時間がかかりました。優秀な看護師さんのほうが、私の全体をみてくれて、励ましてくれるんですよ。

たかがい 私たちはその方の生活をみて、どうしたら苦痛がなくなるか、というところに主眼をおいて考えるので、医師とは見方がちがいますね。

頑張ってきたその果ての現実を 受けて止めるためには

たかがい ご自分が難病だとわかったときの、お気持ちちは…。

さかもと それは…、とてもショックでした。一番考えたのは、生活の基盤がどうなるんだろう、ということ…。私には支えてくれる夫もいませんし、生活は自分で支えないといけない。でも、仕事をしないと、お金は稼げない。「どうやってしまうんだろう」と塞ぎこみました。

たかがい 不安になりますよね…。

さかもと 手の血管が切れて、真つ黒くなっていったんです。私は漫画を描いたり、ものを書く仕事をしてきて、手は、言ってみれば

商売道具。その商売道具が使い物にならなくなったらどうしよう、と絶望しました。自分で言うのもあれですが、私は仕事に関してはがむしゃらにやってきました、できるだけの努力はしてきました。努力して叶うものなら、やってきました。でも、世のなかには努力しても叶わないことがあるんだ、と痛感して…。

たかがい ご家族は、どのような反応でしたか。

さかもと 私は母親とは仲が悪かったんですけれど、難病認定してもらおう手続きは全部母がやってくれました。でも、調べれば調べるほど、今後どうなっていくかわからない病気の…。いずれは金銭的に親の面倒などみたく思っていたけれど、それができなくなるかもしれない。それを伝えるのが本当につらくて…。「今まで頑張ってきた結果が、これか」と天を仰ぐ気持ちでした。

「自分」だけでなく

「他人」も信じてみる

たかがい でも「乗り越えられる人のところに、試練は与えられる」という言葉もあります。

さかもと 私も、苦しみのおかげで同じようなことを考えました。横田^{*}早紀江さんとお話する機会があったんですが、横田さんも、苦し

みのなかで同じことを思っていたんじゃないかと。

たかがい 今、お仕事はどうですか。

さかもと 今までは私には、有名な人に会ったり、そういうことで少しでもチャンスにつながれば、という上昇志向がありました。でも、病気になるたらだめじゃん、と…。マンガ家として、物書きとして、やりたいテーマを書かせてもらえないようになった時期でもありました。けれど、今の状況は、私が読者に対して寄り添う視線をもっていなかったから、その報いを受けたのではないかと、思うようになりました。今の自分は「私も、あなたと一緒にだよ」と寄り添ってくれるものに癒され、励まされています。これまでは、そのような視点が欠けていたのかなと思うようになって、苦しんでいる人のそばに立つことができた、と思うようになりました。

たかがい そこに気づけるのは、以前からそういう視点をもっていたからでしょうか。

さかもと それはわかりませんが、確実に意識は変わってきました。仕事も、病気をカミングアウトして、私の体調に合わせた仕事を可能にしてくれる編集者として付き合えませんか…。今まで一人でがむしゃらに頑張ってきたけれど、他人や第三者の力を信じていることが大切なんだ、と気づかされました。



たかがい 恵美子(---えみこ)

1963年宮城県生まれ。前日本看護協会常任理事。1984年埼玉県立衛生短期大学卒業。1985年埼玉県立衛生短期大学専攻科修了、1989年国立公衆衛生院専攻課程修業、1993年東京医科歯科大学医学部保健衛生学科卒業、1995年東京医科歯科大学大学院医学系研究科博士課程前期修了、1996年WHOエイズコントロールケア研修修了、1997年東京医科歯科大学大学院医学系研究科博士課程後期中退。

社会保険埼玉中央病院、宮城県大崎保健所岩出山支所、宮城県総合福祉センター精神保健部勤務を経て、1997年4月から東京医科歯科大学医学部で文部教官(地域看護学)。2000年8月厚生労働省(旧厚生省)へ出向し、厚生労働技官となる。健康局をはじめ様々な部署を歴任し、2005年保険局医療課課長補佐。2008年3月に厚生労働省を退職。2008年6月日本看護協会常任理事に就任し、訪問看護・介護保険・医療保険などを担当。2009年退任し、現在精力的に全国を巡っている。

情報提供は患者さんの側に立って 親身になってほしい

たかがい 病氣と向き合われて、日々の生活のなかで感じられる点は…？。

さかもと 難病だといわれて、一番しんどいのは、その病氣について調べるときなんです。私は調べものをする仕事をしているし、知り合いも多いので、さほど苦にはなりません。でも、普通のお母さんがある日、子どもが難病だと言われたら、調べるツールも手段もわからずにパニックになってしまつてしまうでしょうね。
たかがい そうですね。その苦しい時期を少しでも短くするように、私たちにもできることがあるかもしれません。
さかもと はい。難病認定に関しても、病院側は慎重にならざるをえないから、すべての検査が終わってからでないと言えない部分もある。だから、とにかく自分で調べられることは、自分で調べまし



た。そのうえで、先生に認定を受けたと言ったら、とても親切に書類を揃えていただきました。でも正直、調べるのが苦手な人には、わかりにくい制度かも、とは思いました。

たかがい たしかに、そうですね。

さかもと だから、どのような制度が利用できるのか、そういうことをもっと詳しく教えてほしいな、と思います。

歌がつかない想いを 歌によって広めていこう

たかがい 今回、私がつくった曲を歌ってくださることになり、とても嬉しく思っています。歌は、どのようなきっかけで始められたのですか。

さかもと 昔から歌っていたわけではなくて、病気を発症して家で塞ぎ込んでいたときに、ずっと音楽を聴いていて、ものすごく励まされたんです。歌にはものすごい力があるなど実感して、私

も苦しんでいる人を歌の力で励ましたい、と思うようになったんです。たかがいさんは、この歌を、どのような思いでつくられたんですか。

たかがい これは私が地域で保健師をしているときに、患者会みんなの想いをつなく財産のようなものがほしいと思つたことから、できた曲なんです。一番は脳卒中後のリハビリを、二番はピュアな心をうまく表出できなくて苦しんでいる精神障害の方を、三番は自分を励ますイメージで歌詞をつくりました。年齢も性格もみんな違うけれど、私たちは時代を共有しています。同じ時代で一生懸命頑張っている人々の思いを、形にしたいと思いました。

さかもと タイトルは、どのように決められたんですか。

たかがい これはみんなで決めました。いろいろ案を出してもらったら、一位が「人生」で、二位が「いのち」。人生って生

さかもと 末明(---みめい)

1965年神奈川県生まれ。玉川大学文学部英米文学科卒業。1987年商社に就職するも3か月で退社。漫画家を志し1989年漫画家としてデビュー。レディーズコミック誌を中心に小説やエッセイも執筆し、最盛期は連載十数本をかかえる売れっ子に。2000年には作家デビュー。コミックにとどまらず次々と話題作を発表し、モデル、舞台、エッセイ、小説、企業講演等、テレビ出演と活躍の場を広げている。2006年からは日本テレビ『スッキリ』レギュラーコメンテーター。

若い女性からは「恋愛と美容のスペシャリスト」として熱烈に支持され男性誌では風俗ネタから国防、政治、教育などお堅いネタにも日々挑戦。趣味：ジャズボーカル(Chelseaとして各所でLIVE活動中)、将棋、着物集め、貯金、変身(コスプレ)。社会貢献支援財団理事、遊戯産業健全化推進機構理事

きることだよねっていうことで、そのままタイトルにしました。今でも歌い続けてもらっているようで、とても嬉しいです。そういうえば、この歌を歌ってください。そういう方が、仙台にまだいらつた患者会の方が、仙台にまだいらつた患者会の方が、会いに行ってみませんか。
さかもと ぜひ、行ってみたい。
たかがい では、一緒に行きましょう！
そこから、この歌のいのちを再生する活動を一緒にしていきたいですね。



たかがいさんが作曲した「人生(いのち)」の入ったCDは、ジャズミュージシャンで、アレンジャー・プロデューサーとしても活躍するクリヤ・マコトさんがプロデュースしています(次ページをご参照ください)。この発売を記念してさかもとさんとクリヤさんから、読者のみなさまにプレゼントがあります！さかもとさんのサイン入りの著書とクリヤさんのサイン入り最新アルバムです。詳しくは67ページをご覧ください。

撮影 大北 学